

## 旧山古志村復旧にみる産業の復興プロセスと新たな展開

### - 農業及び畜産業従事者へのヒアリングからみえてくる今後の山古志の姿 -

福祉社会開発研究センタープロジェクト2  
地域産業グループ 研究員  
東洋大学ライフデザイン学部  
日本学術振興会特別研究員 古山周太郎

#### 1. はじめに

2007年12月23日に旧山古志村への帰村式がおこなわれ、長岡市陽光台の仮設住宅が閉じることとなった。2005年の中越地震の発生から、直後の全村避難の決定、そして仮設住宅での生活と、数年間で旧山古志村の人々をとりまく環境はめまぐるしく変化した。そのなかで、集落を離れる決断をしたひと、集落で生活を再びはじめようとするひと、将来的には集落に帰ろうと思っているひと、それぞれが色々な想いを抱えていることは想像に難くない。結果として、旧山古志村住民の約7割の人々が、自らの生まれ育った場所に戻ることになったのだが、集落に還るにあたっては、いかに生活を組立てなおすのかが課題となる。なかでも、農業、畜産業、養鯉業といった産業は、田畑や池の崩落、牛舎の倒壊など、地震によって多大な被害を受け、産業の存続自体が危ぶまれる状況であった。地震後、多くの復旧事業が実施され、関係者の努力もあり、現在では完全な元通りとまではいかないものの産業の基盤は整いつつある。徐々にもとの山古志の姿に戻っているのだが、住民数が減ったために産業を担う主体の不足や、農産物を取り巻く環境の変化など、産業及び暮らしの立て直しに乗り越えるべきハードルは低くはない。しかしながら、旧山古志村には、地震による被害に耐え、環境の変化に対応し、この逆境を乗り越えようとする多くのひとびとがいる。

本稿では、今後も旧山古志村で生きていくことを決断した人達が、いかなる産業の復興プロセスを経て、震災からの復旧を果たし、かつ今度の山古志の姿を描いているのかを聞き取り調査をもとにみていきたい。特に、産業の復興プロセスにおける、新たな主体との連携の状況や、旧山古志村民同士の関係に着目したい。その際、個別の産業の詳細については、筆者の専門外ということもあり、あえて立ち入らない点を断っておきたい。

調査は、12月24日に長岡市山古志支所で実施した。

対象者は3名であり、1名に対して調査者3名でヒアリング調査を実施した。(実際には総計で7名の方々に調査に協力していただいた。)対象者の基本属性はAさん(男性40歳代、主に米づくりに従事)、Bさん(男性70歳代、主に野菜づくりに従事)、Cさん(男性20歳代、主に畜産に従事)である。調査時間は1名あたり1時間30分から2時間で、調査内容はフェースデーターと、震災前の状況、震災時の被害や仮設住宅における産業の継続状況、現在の実施状況と今後の展開についての意識である。

以下では、ヒアリングにより得られた実態や意見を、震災前の状況、震災直後と復旧期間、現在と今後の3つの時期にわけて整理する。調査対象者が従事する産業はそれぞれ異なり、様々な条件は異なるが、本論では産業の復興のプロセスをみるために、対象者の意見を時期ごとに分類し、その全体的傾向を掴むこととする。

#### 2. 産業の復興プロセス

##### (1) 震災前の状況

Aさん(男性40歳代)は、震災前に主にもち米づくりと、もちへの加工を行っていた。稲作自体は自分の水田で自給用に行っていたが、村でもち米を加工しているところがなかったので、自ら加工を請負いはじめた。その後、もち米をつくるために水田を購入し、近所のひとにもち米をつくってもらい買い取ることもしていた。Aさんの意見では、高齢化が進み、家でもちをつくる人が減少したことが、もち加工の需要があるようだ。

Bさん(男性70歳代)は、震災前に主に野菜づくりと米づくりを行っていた。米は主に自給用である。野菜づくりは、米づくりの合間にできること、家でいることが多くなったため、畑をやりたいと思ったことがきっかけではじめた。また、Bさんは、15年ほど前に仲間たちと野菜や山菜の直売所をはじめている。直売所は村の外からきた写真を撮影しに来たひとがよく利用し

ていたようである。

Cさん(男性20歳代)は、震災前に1年間、家業の畜産を手伝っており、東京の大学で畜産を学んだ後、父親の見習いをしていた。主に、牛の肥育を中心に、一部一貫飼育を行っていた。

## (2) 震災後から復旧期間

震災後、旧山古志村では全村避難を決定するが、それに伴い、3名とも一時的に村から離れることとなる。そして、彼らは形を変えながら自らが従事してきた産業を続ける。

Aさんは、震災によって自分の所有する水田も被害をうけた。しかし、地震前に長岡市に購入していた水田で米づくりをはじめた。そして、震災からの復興をきっかけに、他の集落の農家との関係が生まれることとなった。ここでの関係を生かし、彼らと一緒に生産組合をつくり、新しい農法でつくった米を、個人販売やホームページを通して売り出す。Aさんはその農法で作った米を買い取り、出荷配送を請負うこととなる。Aさん自身は、他の農家との関係が生まれ、新たな米づくりの契機を得られたことがよかったとの意見を述べている。

Bさんは、仮設暮らしのなかで、集落の隣の敷地での健康農園や、畑の学校といった組織を通じて、野菜づくりと関わっていく。畑の学校は、長岡市の農家から野菜づくりを教えてもらおうということが契機となった。畑の学校をはじめるとあたり、青果市場の関係者や、土地改良区のひとと相談し、地元の農家からいろいろなることを教わったことは良い経験となったと述べている。また、かぶら南蛮を通じて長岡市の業者と取引ができ、雪白体菜を長岡市の給食の食材として提供するなど、新しい販路がつくられた。また、震災前にはなかった野菜の出荷組合を15名程度で組織している。他には、健康農園が一番の交流の場であったとの感想や、仮設住宅の前の菜園などを通じて住民同士が以前よりも親密になったとの感想を述べている。

Cさんは、震災で牛舎が倒壊する被害を受けたが、飼育していた牛の半数が助かった。それらの牛を飼育するため、新たな牛舎を探す必要があり、家畜の仲介業者のひとを通じて新たに村外に開いていた牛舎を間借りさせてもらうこととなる。その後、長岡市内で使用していなかった牛舎に移り、仮設で暮らしながら、牛舎に通って飼育を続けた。

## (3) 現在の状況と今後に向けた課題

現在は、3名とも旧山古志村にもどり、震災前と同様に農業や畜産を再開しているが、震災そして復旧期間での経験が大きく影響しているのである。

Aさんは、復旧期間から携わっている新しい米づくりを続けながら、集落に戻り米づくりを再開した。そして、他の住民が、震災によって耕作困難な状況に陥った棚田の耕作を請け負うことをはじめている。また、小学生や村外の人々に農作業を体験してもらうことを企画している。Aさんは、今後の山古志での農業は、機械化と組合による耕作の主体づくりが課題となると考えていた。可能な限り機械化することで、田圃の耕作放棄が減るだろうと推測しているが、農業機械の共用化が難しいことや、コストの問題などが課題にあげている。自ら生産組合に関わり、耕作を請け負っているなかで、今後は従来と違うかたちでの耕作主体が必要だろうと認識していた。農作業の請負は増やす方向であり、若い世代が中心となって共同で米づくりをするための組織づくりが不可欠であるとしている。震災は、今後の営農のありかたをみんなに考えてもらう契機となったとし、山古志の“結”の習慣や、協力して山古志で暮らすという想いで、今後の農業の方向性を案じていた。

Bさんは、自らの田圃の面積が震災の復旧工事に伴い、7反から4反へと減少した。また、田圃に入った土がよくないことを憂慮している。野菜づくりは順調に継続して行っており、新たな品種にもチャレンジしているようである。Bさんも、Aさんと同様に震災後、隣家の田圃の耕作を請け負っていた。意識としては、地震で人口が減ったことが危機感となり、集落の人々が仲良くしなければならぬとの思いを強くしていることを感じている。今後は、直売所のありかたを変えていかなければならないこと、村の外の人との関係を強めることを意識していた。震災前から行っていた直売所だが、これまでは仲良しグループであった点、複数のグループの連携が不足していた点を反省し、もっとオープンに話し合う場の必要を感じている。直売所の再編と共に、村の外から人を呼ぶことも重要との見方である。もともと、直売所を通して県外からきた写真愛好家との付き合いがあったが、それを継続し集落の民家に宿泊してもらうことや、震災で村をでた人たちに畑と部屋を貸すことなどを提案している。元来、出稼ぎや錦鯉の買い付けなどを通して、村と外の人たちの交流はあったが、それが震災復旧の過程で村外の人達に力を貸してもらったことで、人々が村外の人との付き合いをより大事にするようになったのではと感じている。

Cさんは、震災後牛舎を共同で再建し、これまで牛の飼育を取り仕切っていた父親にかわり、自らが責任をもって飼育と経営にあたることとなった。震災後、小規模に牛の飼育を行っていた人達は多くのひとがやめていったが、Cさん達は山古志の地で牛を飼うとの思い

のもと、土地を探して牛舎の完成に至った。新しい牛舎では、機械を共用し、たい肥づくりを共同で行う予定である。土地を共同購入したことに伴い、肉用牛の生産組合を結成した。今後は、新しい方法を取り入れ、自らの思い描いていた牛の飼育を実現させたいとの意識がみられた。

### 3. 考察

これまでのヒアリングの内容をもとに、震災からの復興プロセスにおける、随所に新しい主体との関係と、住民同士の関係の変化を追っていきたい。

ヒアリングの内容からは、震災前から既に集落の人達との関係をもとに、野菜づくりや米づくりが行われていた。もち米づくりの委託や、野菜直売所の運営など、近隣の仲間との関係は不可欠であった。ただ、高齢化により自宅でのもちつきが減少し、もち加工を請け負うことになるなど、住民同士の関係にも従来からの変化がみられる。震災によって、それまで抱えていた課題が表出する。特に、人口が少なくなったことや住民を取り巻く状況が変わったことが一因となり、近隣の住民から米づくりを頼まれる状況がみられた。米づくり主体不足は深刻であり、今後は請負や共同耕作の必要性を感じていた。産業を担う主体の問題は、米だけに限らず、あらゆる産業で起こっている事象であろう。今回の調査では、出荷組合や生産組合を結成するなど、徐々にではあるが主体の組織化がみられた。今後は、仮設暮らしの経験のなかで培った、住民同士の関係を活かしながら、住民間の連携を強めていくこ

とが不可欠であるといえよう。

住民同士の関係づくりと共に、新しい主体との関係が復興のプロセスでみられた。震災からの復興をきっかけに、他の集落の農家との生産組合をつくったこと、仮設に移ったことで長岡市の農家の指導を受け、販路づくりにも繋がったことは注目に値する。また、牛の飼育についても仮設暮らしの期間に他の牛舎を間借りするなど、村外のひととの協力のもとに飼育が続けられた経緯がある。今後の方向性でも、新しい主体との関係をより強めていく意識がみられた。復興プロセスで築いた関係は、今後も続くであろうし、山古志の産業にとっては新しい変化を呼び込むものである。また、現在は試行錯誤の段階だが、村外の人々をいかに山古志に呼び込むかについても強く意識していることがわかった。

### 4. まとめ

旧山古志村の産業の復興プロセスは、一面では住民同士の連携の必要性を喚起し、新しい主体との関係づくりの機会であったと捉えることができる。震災によって、従来抱えていた問題が一気に表出したのだが、それが人々に自らの状況を今一度見つめなおし、山古志で暮らし続けるためにどうすればよいのかを考える契機となったことは否定できない。産業を取り巻く状況は厳しいが、今回みたように、住民同士の支えあいの関係を強めながら、産業を通じて村外の人達と連携を深めつつ、色々な方向性を模索することが、新たな山古志での生活を描くことに繋がるのではないかと

震災前	震災	仮設暮らし	現在	今後
<p><b>■もち米づくり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子供のころから耕作には慣れ親しんでいた。自給用の田(1反くら)を持っていた。</li> <li>もち米を作るために、水田を新しく買った(5反くら)。虫籠の田んぼを購入した。全面もち米で、品種はコシヒカリ。</li> <li>震災前は1反で7袋くら、全体で40袋を穫れていた。また近所の人にもち米を作ってもらって、それを買ったりしていた。</li> </ul>	<p>・自分のもっている水田のほとんどがダメになった。復旧まで養蚕を年加かり昨年のお客から作付けを再開している。</p>	<p>・地震前に奥田に田んぼを買っていた(三反五畝、三畝)。倉倉山のすぐ裏で土質は村内と同じくらい。仮設住宅に住みながら、その水田で米(コシヒカリ)を作っていた。</p>	<p>・地震後、播田で代わりに米を作って欲しいという要望があった。四反を譲り、コシヒカリを作っている。1反当たり米を地主さんに納める。</p> <p>・まちの人を呼ぶがということを少し始めている。</p> <p>・三人農のグループに農作業を依頼してもらったり、小學生に田植えをしてもらったり。これから3年間人が呼ぶのに大切な時期だと思ふ。</p>	<p><b>■新たな主体づくり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>今後、作業を譲り合ったり人が出てくると思う。まずは先行事例をつくることが大切。今までは違うことをやっていた。</li> <li>自身でも、譲負は今後増やしていきたい。今の指(2町)はできると思う。作業場所が南々として大変なので、農地の交換など新たな仕組み作りが必要だと思ふ。</li> </ul>
<p><b>■もち米加工</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>もちの加工は、多量の仕事が多かったため、もち米を加工して製菓にして売ることになった。村では経もやっていたので、再売になると思った。</li> <li>他の人からも、もち米の加工を頼まれたりして、喜ばれている。村では家でもちをつく人が少なくなっていて、需要はある。高齢化が一つの原因ではない。</li> </ul>	<p><b>■三人農米</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3人農を通じて、播田原の近森農園との関係ができた。その人が播田原をやっており、2006年からコシヒカリで始め、それを3人農米とした。</li> <li>奥田の35アールの水田で作っていて、収穫は1トほど。</li> <li>販路は昔人販売で、ホームページで売るケースや、三人農がディナーショーなどで宣伝してもらっている。</li> </ul>	<p>・「3人農米」は現在400人(5畝)の客がいる。3キロが920円、1キロが990円で販売しており、たいたい売れ切れる。</p> <p><b>■生産組合</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2~4名の生産組合で作っている。播田原農園を借りてもらい、その人たちの米を買い取って、こちらでパックングして配達する。JAより価格は高く、コシヒカリと同じくらいで購入している。</li> <li>生産組合は地震後にできた。農機具が壊れたら、年々による意欲減退がきっかけになったのでは無い。</li> </ul>	<p>・米を作り続けるためには生産組合が必要。共同で米作りをするには避けられない。組合は20~60才代の人が中心となると思う。</p> <p><b>■機械化</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農業も機械化をしないと、やっぱり売れない。播田の農機も買えない。</li> <li>機械化にはお金がかかる。今後は播田を維持していくために、付加価値をあげて買をあげる。また販売するノウハウが必要。</li> </ul>	
<p><b>■意識</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・もち米づくりについて</li> <li>・兼業は今ほどエコという概念ではなく、製菓を作っているうちにたわわらなくなった。</li> <li>・米作りにおいて、競争性や楽しさを重視している。めんこいんてい方ではないと思う。</li> </ul>	<p>・地震後、奥田に帰って、山古志でもち米づくりをまた始めた。絶対に山古志に帰ると決めていた。</p> <p>・災害復旧は現状復旧が原則。播田も例にもれず現状復旧だったので、機械が入れない播田にしてしまったことは残念。</p>	<p>・山古志には、昔から猪(と)という風習がある。そういう気持ちを持つことが大切だと思ふ。</p>	<p><b>■新しい世代・人材づくり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分達の世代が、共同作業が必要だということを出していかなければならない。話すことで関心を持ってくれるチャンスがあるし、下の世代にも伝わる。住民意識はそこの話をするよい機会。少し評している存在かもしれないが、構わない。</li> <li>・自分のような人がもっと出てくること。ここでやっていくんだという気持ちと、市場にどう売せるのかを工夫することが重要。</li> </ul>	

図1 Aさん(40歳代:農業)の産業の復興プロセス

震災前	震災	仮設暮らし	現在	今後
<p><b>■直売所</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>15年くらい前、仲間と135坪の前で直売を始めた。最初は山菜が中心だったが、野菜を入れたら評判が良かった。</li> <li>山菜を賣るのは、主に村外から写真を通りにきた人が多く、村内の人はあまり買わない。</li> <li>直売所は、夏野菜も振って、年間40万円くらいの売り上げがあった。</li> </ul>	<p>田んぼは4反になった。徳田の時に道路が走るようになってしまったので、住んだ。夕飯などに露い合新しい田にひとひと土が入ってしまった。お茶を飲むようになった。</p> <p><b>■複床農園</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>仮設を作る前から、農園を作って欲しいと要望して複床農園を作った。農園を作って欲しいという要望が強かった。</li> <li>隈元台の住宅の前は、いつのまにかみんなが野菜を作っていた。場所もきちんと区画を作り、分けていた。</li> <li>複床農園は3町ほど、90m近くの世帯が利用したと思う。</li> <li>複床農園が一番の文交の場だった。</li> </ul>	<p><b>■畑の学校</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地元の農家の人から野菜作りを教えてもらえないかということで、市場の関係者や、土地改良区の人たちと相談。農園で有名なナス作りの方がいて、その人の指導は役立った。</li> <li>家で15分くらいの場所に畑を1町ほど借りた。様々なものをつづった。平場の広い畑で、耕すのが大変だった。中心となるのは10名くらい。</li> </ul> <p><b>■野菜の販売</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>かぶら南農と東田市の農者がブランド化したいと言ってきて、その関係は今も続いている。</li> <li>■白豚菜が、2年前から市内の学校の給食として提供されている。地産地消の企画で、給食センターが買い取ってくれる。出荷組合を15~18名で組織している。</li> </ul>	<p>地震後、隣の家の田んぼ(8反)も作ってくれと言われて、引を交けることにした。</p> <p>今も続いており、10名くらいで状況農産に2反くらいの畑で作業をしている。所有者はメンバーの一人。</p>	<p><b>■直売所の連携</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>直売所のグループは村内にいくつかあるので、それらがオープンに話し合う場が必要だと思ふ。いくつかのグループがうまくつながれば、いい流れになっていく。ダメだったら悪くはならない。</li> </ul> <p><b>■村外のひとつの関係づくり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農園に移り住んだが、村内に畑と副業を貸してくれという人もいる。連中は樹木から写真を取りに来る夫婦がいる。こういう人たちとの付き合いは楽しい。また農園の中には、自分の家に泊まっていてくれるという人もいる。</li> </ul>
<p><b>■畜産</b></p> <p><b>■直売所について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの直売所のグループは良い意味でも悪い意味でも、仲良しグループだった。</li> </ul>	<p>仮設で暫く住り合って住んだことで、前よりも親密になったと思う。</p> <p>地震後は絆が強まったのではないかと感じる。</p> <p>地震で人口が減って、戸数も減ったことが危機感となって、仲良くしなければという思いが強くなった。</p>	<p><b>■村外の人を呼び込む畜産</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地産をきっかけにして、大勢の村民がオープンになったと思ふ。もともと、全国から韓コイを買い付けに来る。また自分たちも出探をさせて外に出ている。地産でいる人にも力を貸してもらったという経験がある。今後は人との付き合いをより大事にするのではないかと。</li> </ul>		

図2 Bさん(70歳代:農業)の産業の復興プロセス

震災前	震災	仮設暮らし	現在	今後
<p><b>■牛の飼育</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2000年に東京の大学畜産学専攻を卒業、実家の畜産を手伝った。もともと、父親は30年くらいまえに始めたらしい。帰ってきた次の年に放棄した。</li> <li>帰ってきてから1年間は見習いみたいな感じだった。</li> <li>80頭くらい牛がいて、繁殖牛は15頭いた。一軒一軒飼育で、足りない仔牛はよそから購入した。生まれた牛は自分の所で肥育。年間14頭くらいは見込めた。</li> </ul>	<p>自分は本道の牛舎にいて、揺れを感じて牛舎の外に出たら牛舎が倒れた。結局2棟あった牛舎のうち、1棟しか残らなかった。</p> <p>助かった牛は、家畜商のひとに見つけてもらった空いていた牛舎(熊沼の成神村)に間借りという形で入れた。9カ月間、仮設から管理のために通った。</p> <p>その後、東田市内の牛舎に移した。そこは10年くらい前に牛をやめていたところ。今いる47頭は今月の28日に山吉の牛舎に売ってこれる</p>	<p>現在、自分が中心になって肉牛飼育を行っている。父親はアドバイザー的な立場になっている。</p> <p><b>■共同所有と生産組合</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2軒が共同で牛舎をやる。機械も土地も共同で持つ。今後のことを相談していて、共同でやることになった。建設費は出し合っている。</li> <li>建設の地権者に了解を得て、土地を共同購入した。国の事業でやったので、山吉肉用牛生産組合というものを作った。</li> </ul>	<p>し原処理については、フンは鳥糞や、知り合いの木村農から手に入るおがくずを混ぜる。地肥作りは共同でやることになる。1か月置きかして、農家の田畑に敷くまで、こちらでやることになると思う。</p> <p>■県の地産地消公社の人が、牛を休耕田などに放牧してはどうかと提案してくれた。場所の選定や、管理してくれる人などの問題があるが、考えてみたい。</p>	
<p><b>■畜産</b></p>	<p>とにかく、あそこ土地で牛を飼うという思いが強かった。</p> <p>販路は東京の食肉市場に出している。市場に出して評判して売れるのはやりがいがある。自分の実力もたかめせるし、できれば、高評案に出したい。生産農家としては置れがある。</p>	<p><b>■新しい世代・人材づくり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地震があったから経営の引継ぎがうまくできた。父親は良かったと言っている。農家の引継ぎは難しい。</li> </ul>		

図3 Cさん(20歳代:畜産業)の産業の復興プロセス